

大宅壮一 (おおや・そういち) 1900～1970

評論家 ～マスコミの帝王～

出生 1900年(明治33)9月13日、大阪府富田村(現・高槻市)に父八雄、母トクの三男として生まれる。生家は醤油の醸造と小売りを兼ねていた。

履歴 1922年、第三高等学校を卒業し、東京帝国大学文学部教育学科に入学、まもなく社会学科に転ずる。1925年、新潮社嘱託になり、『社会問題講座』を編集。1928年には「総合翻訳団」を組織し、「千夜一夜物語」を翻訳。1941年、満州へ渡り満州映画協会の責任者となる。その後、ジャワ派遣軍に徴用されるが、1943年帰国。1944年から48年頃までは農業に従事、文筆的断食時代と称した。1950年前後にはジャーナリズムへ復帰、本格的な文筆活動に入り、新聞・雑誌のほかテレビ・ラジオでも大活躍をした。

事績 少年時代は父に代わって家業を支え学校に通う。文学少年で少年雑誌に数多く投稿、賞を獲得した。茨木中学時代の米騒動では民衆蜂起を支持し、放校処分を受ける。若い頃はマルクス主義に傾倒し、昭和初期、左翼系の文芸評論家として出発。25歳の若さで編集刊行した『社会問題講座』は大成功を収める。その後、次第に思想やイデオロギーからではなく、風俗や世相から時代の深層に潜むものに目を向けるようになり、これが戦後のマスコミでの活躍につながった。1957年、「ノンフィクション・クラブ」を結成し、若手ジャーナリストを育成。1969年には「大宅壮一ノンフィクション賞」の創設が発表される。「本は読むものではなく、引くものだよ」「雑誌は資料の宝庫。事件、時代の背景がたくさん盛り込まれ、視点がつまっている」と語っていたように、収集した資料は20万冊にも及ぶ。その資料「雑草文庫」は、その後「大宅壮一文庫」へと継承され、1982年には「わが国唯一の雑誌図書館として社会に寄与した実績」により菊池寛賞を受賞。マスコミ界のみならず、図書館界にも大きな役割を果たし続けている。

評価 戦前・戦中・戦後という目まぐるしい変転の時代を第一線の評論家として生き抜く。「マスコミの帝王」と呼ばれ、ジャーナリズム界のオピニオンリーダーだった。評論の対象は政治・社会・文化から流行・風俗・マスコミにまで及び、大衆的で身近な評論家として稀有な存在であり、同時にマスコミの歴史の偉大な語り手でもあった。著作の多くが今日でもその新鮮さを失っていないのは、時代や人間に対する深い洞察が未来の時点をも取り込んでいるからと評されている。

代表作

『モダン層とモダン相』 社会評論家としての地位を固めた1930年代のエッセイ。昭和初期の世相や風俗を短い文章で鋭くとらえている。大宅が後年「軽評論」と呼んだもので、ジャーナリストとしての才能がよくあらわれているとされる。全集第2巻に収録。

『世界の裏街道を行く』 著者54歳からの旅で、歩いた国々は百数十カ国に及ぶ。単なる旅行記ではなく街を歩き、庶民の生活に直にふれ「人間の生活とは、文化とは、生きることの意義と喜びとは何か」を問いかけている。各国の歴史や社会に対する博学ぶりが感じられる。全集第18～22巻に収録。

キーワード 造語の名人 昭和の世相を反映し、物事の本質に迫った数多くの新語を生み出した。テレビの低俗番組の氾濫を「一億総白痴化」、戦後各地に新設された大学を「駅弁大学」、文化大革命を「ジャリ革命」と名づけ、批判し揶揄した。その他にも「恐妻」、「太陽族」、「家庭争議」などがある。

エピソード 昭和7年警視庁特高課に検挙された時、刑事の転向要求に「ぼくが転向するなら共産党になります」と答え、正体不明ということで釈放された。また、茨木中学時代の先輩、川端康成とは親友。

神奈川 墓所は鎌倉瑞泉寺。境内には大宅の有名な言葉「男の顔は履歴書である」の記念碑がある。

最期 1970年(昭和45)11月22日、心不全のため東京女子医大病院で死去。享年70歳。



大宅壮一文庫提供

Great Works 36

大宅壮一全集 全31巻 蒼洋社 1981～1982年 <081.8 / 83>

解題 没後10年目の刊行。単行本を主体としながら、「サンデー時評」など未刊行の雑誌連載原稿、猿取哲(さるとる・てつ)のペンネームでの匿名原稿、さらに少年雑誌への投稿文等も収録する。編年体の編集で著者の見方や考え方、スタイルの変化を知ることができる。戦後日本のジャーナリズムの全容を伝える資料であり、大宅壮一という角度からみた現代史の書でもある。

内容

第1巻 文学的戦術論 [中央公論社 1930年 大宅壮一の最初の単行本]

- 第2巻 モダン層とモダン相 [大鳳閣書房 1930年]
 第3巻 ジャーナリズム講話 [白揚社 1935年]
 第4巻 宗教をののしる [信正社 1937年 原題『宗教を罵る』]
 第5巻 蛙のこえ [鱒書房 1952年]
 第6巻 「無思想人」宣言 [鱒書房 1956年]
 第7巻 現代の盲点 [春陽堂書店 1957年]
 第8~9巻 サンデー時評 ・ [1965年~1970年までの5年間にわたり『サンデー毎日』に連載]
 第10巻 日本の企業 [朝日新聞社 1958年]
 第11巻 日本の人物鉅脈 [文芸春秋新社 1959年]
 第12巻 日本新おんな系図 [中央公論社 1959年]
 第13巻 昭和怪物伝 [角川書店 1957年]
 第14巻 大学の顔役 [文芸春秋新社 1959年]
 第15巻 人物料理教室 [1965年~1970年まで『週刊文春』に連載]
 第16巻 日本拝見 [中央公論社 1957年 原題『僕の日本拝見』] 日本の裏街道を行く [文芸春秋新社 1957年]
 第17巻 外地の魅惑 [万里閣 1940年]
 第18巻 世界の裏街道を行く 中近東・ヨーロッパ・アフリカ編 [文芸春秋新社 1955年]
 第19巻 世界の裏街道を行く 南北アメリカ編 [文芸春秋新社 1956年]
 第20巻 世界の裏街道を行く 東南アジア編 [文芸春秋新社 1961年 原題『黄色い革命』]
 第21巻 世界の裏街道を行く ソビエト編 [『ソ連の裏街道を行く』 文芸春秋新社 1962年 『この目で見たソ連』 光文社 1962年]
 第22巻 世界の裏街道を行く 東欧・小国編 [『東欧の裏街道を行く』 文芸春秋新社 1962年 『小国の裏街道を行く』 文芸春秋新社 1962年]
 第23巻 実録・天皇記 [鱒書房 1952年]
 第24~27巻 炎は流れる ~ [文芸春秋新社 1964年 産経新聞に連載されたが、中断。まえがきで本書は「歴史ではなく旅行記でありタテの紀行文である」と述べている]
 第28巻 日本の遺書 [ジープ社 1950年]
 第29~30巻 中学生日記 ・ [『大宅壮一日記』 中央公論社 1971年 生涯でただ一つの日誌]
 別巻 大宅壮一読本 [大宅壮一の世界 大宅壮一への視点 大宅語録エッセンス 素顔の大宅壮一 歿後十年目の全集 年譜 著訳編書一覧 大宅壮一文庫人名索引「大宅壮一」目録]

参考文献 ~この人をもっと知るために~

<図書>

- 📖 裸の大宅壮一 マスコミ帝王 / 大隈秀夫著
三省堂 1996年 605p <289.1FF / 357> 資料番号 20947040
- 📖 大宅壮一を読む / 大隈秀夫著
時事通信社 1984年 215p <289.1/3889> 資料番号 21273628
- 📖 大宅壮一とその時代 / 進藤謙著
東京書籍 1983年 230p <289.1P / 2053> 資料番号 12361473
- 📖 大きな駄々っ子 大宅壮一と共に歩んだ四十年 / 大宅昌著
文芸春秋 1972年 286p <915.9 / 457> 資料番号 12028791
- 📖 毒舌一代 大宅壮一を裸にする / 中出正男著
太平出版 1967年 216p <289.1 / 1506> 資料番号 10535714

<図書(部分)>

- 📖 解説 大宅壮一の世界 / 青地晨著 (大宅壮一・一卷選集 無思想の思想)
文芸春秋 1991年 p501-565 <041AA/109> 資料番号 20403820
- 📖 大宅壮一 / 川本三郎著 (言論は日本を動かす 第8巻)
講談社 1985年 p243-269 <281T/122/8> 資料番号 12357224
- 📖 ノンフィクション・クラブ 大宅壮一とその周辺 / 青地晨著 (講座・コミュニケーション 第4巻)
研究社 1973年 p294-309 <361.5/111/4> 資料番号 10972693

<雑誌論文>

- 📖 大宅壮一・生誕100年、没後30年 ジャーナリスト精神とは何か。 / 植田康夫 ; 大下英治 ; 森詠鼎談
潮 (潮出版社) 通号501 [2000.12] <Z051/86>
- 📖 活字の“目利き”、大宅壮一の生涯 / 鹿島茂著
東京人 (都市出版) 14(6) [1999.6] <Z051/584>